

## マタイによる福音書5章3節 「霊の乞食」

### 1A 天の御国の福音

1B シナイ山での主の顕現

2B 異邦人に虐げられた民

### 2A 心の貧しさ

1B 「幸い」の始まり

2B 無きものにされる自己

### 3A 主ご自身との出会い

1B 神の栄光との比較

2B 自己変革の絶望

## 本文

マタイによる福音書 5 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、マタイ 4 章まで来ましたが、今日、午後に 5 章の前半を一節ずつ読んでいきたいと思います。今朝は、5 章 3 節に注目したいと思います。「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。**（新改訳 2017）」

私たちが 5 章から 7 章において見るのは、キリスト教の教えとしてあまりにも有名な、「山上の垂訓」あるいは「山上の説教」です。八つの「幸いなるかな」という宣言から始まり、あなたがたは地の塩です、世の光ですという宣言、そして数々の、あまりにも守りようがないような、高い基準の教えが続きます。信者でない人でも知っているような言葉もたくさんあります。「汝の敵を愛せ」という言葉がありますね、「**あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。(5:39)**」という言葉もありますが、面白い話を聞きました。クリスチャン二世の牧師さんと交わっていた時に、興味深いことにお二人が同じ経験をしていました。小学生の時に、いきなり友達から殴られたそうです！なぜなら、今のイエス様の言葉があるから、お前はやり返さないんだよな、と言われたそうで、一人はすかさず殴り返したそうです！もちろん、本人ではなく、親が吹きこんだのでしょうか、それだけ有名な言葉だからですね。そして日本語にさえなっている表現があります。「豚の真珠」なんていう言葉、イエス様が言われた命令から来ています。

山上の説教ほど、キリスト教という枠組みを超えて、世界に、歴史において知られている教えはありません。それだけ、倫理的にとっても高く、普遍性があるからと言えるでしょう。けれども、それゆえに、イエス様がここでお語りになろうとしていた本意、真意を知る必要があります。表面的に読んでしまうと、これほど誤解を招く箇所はないからです。

その誤解のほとんどが、今朝学び、5章3節の意味、また4節もそうですが、その箇所を飛ばしてしまうからです。心の貧しい者とは何なのか？これを知って初めて、その後の教えの意味が明らかにされます。そして、私たちはマタイによる福音書を1節から読み始め、ここにまで来ました。いや、創世記から読み進めて、旧約聖書全体を読んでここにまで来ました。そこに啓示されている、神のご計画全体を背負って、イエス様は山の上で、神の国の宣言をされたと言ってもよいでしょう。ここにあるのは、神の国の福音の神髄です。

## **1A 天の御国の福音**

### **1B シナイ山での主の顕現**

背景を知るために、まず5章1-2節に注目してください。「その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた。」

イエス様は、バプテスマのヨハネと同じ言葉によって、宣教を開始されました。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。(4:17)」天の御国の王であられるキリストが来られたのだから、あなたがたは悔い改めなさいと説かれました。御国の福音を教えて、あらゆる病、あらゆる患いを癒されたと4章23節にあります。それでたちまち、シリア全域、またイスラエルの全域から人々がやって来ました。彼らは、御国の良き知らせを聞きつけたのです。それは概念でも哲学でもありませんでした。病が癒される、悪霊が追い出されるという、自分の生活の根幹を変えていただける救いの言葉でした。こうして群衆となって、イエス様のところに人々がついて来ました。

けれども、その中で「弟子たち」もいました。彼らは、イエス様の行なわれること、語られることを見聞きするためだけでなく、イエス様と共に生活して、お供をして、それで主であるこの方のようになろうとして、学んでいる者たちです。今の言い方をするなら、群衆は野球の熱烈なファンであっても、野球のチームの中には入らない人たちです。応援団であっても、その中には入って来ません。イエス様を監督とする選手たちがいて、イエス様が行なわれることに自分もその一部になるように決めている者たちです。彼らを近くに引き寄せました。つまり、イエス様が教えておられることは、群衆にも聞かせていますが、主に弟子たちに対してです。彼らに対して、「幸いです」と呼びかけられています。なぜなら、彼らこそがイエス様の言葉に反応して、悔い改めてイエス様についてきている者たちだったからです。

そして、「山に登られ」ています。ここが、カペナウムの近くで、山腹になっているところでしょう。カトリック教会は、伝統的にここではないかと思っているカペナウムの近くの山腹に、山上の垂訓の教会を建てていますが、イエス様がここで、イスラエルの民がシナイ山の麓に連れてこられて、そこで主がシナイ山から民に語られた時のことを意識しておられるに違いありません。シナイの荒野にあったホレブの山では、十戒を始めとする神の言葉、命令が語られました。それがあまりにも聖

く、自分が生きていけるのか？と恐れを抱きました。しかし、イエス様はガリラヤの山において、正しい神、聖なる神の前に近づいた者たちが自分はまだ駄目だと思い、自分のうちには良いものが全くないという、自分に対する圧倒的な無力感、絶望感を抱いた者たちを前提にしておられます。そして、そうした者たちに「あなたがたは幸いです」と恵みの言葉をかけておられます。

## 2B 異邦人に虐げられた民

そして今、ここに集まってきている人々は、マタイがイザヤの預言を取り上げたように、「闇の中に住んでいた」人々であり、「死の陰の地に住んでいた者たち」であったことを思い出してください。「闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。(4:16)」私が、初めて神を自分の心の中に受け入れる祈りをささげた時、クリスマスの夜でした。クリスマス礼拝に参加して、その時に闇の中に光として来られたキリストが説教壇から語られました。その時はそのまま帰宅したのですが、自分の部屋の中でこれまでの人生を振り返り、自分が神に背を向けて生きてきたことを悔いて、その罪を告白する祈りを捧げました。すると、神が自分のすべてを、愛の包容によって受け入れてくださったことを感じました。ずっと後で思い起こして、ある方に自分の状態を話したら、抑鬱の症状ですねと言われました。孤独、鬱、自殺、引きこもり、家庭内暴力、あらゆる問題が今、日本に横たわっていますが、キリストは闇の中に来られました。

当時、彼らが置かれていた闇というのは、異邦人による抑圧的な支配でした。前回、お話したように、アッシリヤによって捕え移されて以来、そこはバビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、そしてローマの支配を受けて行きました。そしてユダヤ人に対して、その尊厳を踏みにじるようなことを行ない、政治的な弾圧を行ない、また高い税を課し、搾取していました。そこでユダヤ人たちは、自分たちの救い主、メシアを恋い慕っていました。そして、その状況から解放してくださる方が、メシアだと彼らは解釈していました。自分たちが囚われている中で、ローマの力を押し潰してくださる方がメシアだということです。

## 2A 心の貧しさ

しかし、はたして旧約時代の預言者たちは、いつも政治的、軍事的な救いのみを語っていたのでしょうか？そのような外側の解放、救いについての多く語りましたが、内なる解放について語りました。「主は心砕かれた者の近くにおられ、霊の砕かれた者を救われる。(詩篇 34:18)」心砕かれ、霊が砕かれた者を救われると言われます。ユダヤ人たちは、敵はローマであるとしていました。しかし、イエス様は基本的に、「私たちを不幸にしているのは、外の敵ではない。私たち自身だ。」と言われているのです。そして、この自分こそが敵であり、自分というものからの解放こそが、まことの救いであるとイエス様は説かれたのです。これは、ローマに対する武力闘争こそが救いと考えていた熱心党よりも、熱心なことでしょう。もっと過激なことでしょう。映画「復活」においても、主人公のローマ兵は、熱心党のユダヤ人兵士を剣でもって倒すことよりも、「イエスは甦った」と言うてはばからない、何の武器も持たない普通の、素朴なユダヤ人こそが脅威であり、恐れをなしてい

ました。救いとは、まず初めに、心の一新であり、霊の一新なのです。ですから、「**心の貧しい者は幸いです。**」とイエス様は言われました。

ですから、イエス様の語られていた「**天の御国**」とは、この世のものではありません。この世に生きる者たちに、目で見える変化を与える、生々しい、力あふれる国ではありますが、この世を超えてしまっています。イエス様が、十字架刑の判決を受ける前に、総督ピラトに対してこう言われました。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったことでしょう。しかし、**事実**、わたしの国はこの世のものではありません。(ヨハネ 18:36)」イエス様は、ユダヤ人に対して「**神の国**」を語られる時に、あえて神の御名を使わず、「**天**」と言い換えておられます。主がお語りになっている御国は、この世のものではなく、天におられる神からのものであり、混じり合わないものなのです。多くの人が、山上の説教を道徳の規則であるとか、あるいは個性を変えることであるとか、社会運動であるとか、いろいろ解釈します。クリスチアンの世界では、社会運動や道徳の規則として捉える人もいますが、自分を変えられることを「個性を変える」ことに混同している人々が多いです。なので、クリスチアンと言うと、何か弱々しい、内気な人であれば成功していると思います。けれども、聖書を見てください、使徒パウロ、ペテロ、ヨハネ、個性派揃いです。回心した後で、個性が変わることはありませんでした。そのままのあなた、のままなのです。しかし霊の実質が変わりました。キリストに似た者とされていきます。ですから、この世のものではないのです。そういったこの世にあるものを超越した、天からのもの、混じり合わないもので、霊的な変革なのです。

### 1B 「幸い」の始まり

イエス様は、ここで「**幸いです**」と繰り返しておられます。八回繰り返しているのです、しばしば「**八福**」と呼ばれます。天の御国の福音を語られるのに、イエス様は初めに、御国に入る者たちの状態や態度を宣言しておられます。外側の環境が変わることではありません。また自分が何を行なったのか？ということでもありません。その内なる姿勢を宣言しておられます。存在や状態を初めに宣言しておられます。ダビデもかつて、自分の罪を隠して、骨が内側で乾いてしまうような苦しみを味わったが、それを言い表したら罪を全て赦していただいて、「**幸いなことよ**」と言いました。「**幸いなことよ、その背きを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ、主が咎をお認めにならず、その霊に欺きがない人は。(詩篇 32:1-2)**」その幸福感を自分の手にしているかどうか？があります。

### 2B 無きものにされる自己

その幸いの全ての始まりは、「**心の貧し**」さであります。イエス様が語られるのは、この世のものとは正反対であります。真っ向から対立します。心が豊かにされることが、幸せへの道であるとなります。多くのものが満たされるように、人々は幸せを求めて動いていきます。確かに、主はご自分の御霊で私たちを満たしたいと願われています。しかし、満たすためには初めに空っぽになってい

なければなりません。他のものが詰まっていれば、神はご自身で私たちを満たすことができます。したがって、幸せというのは捨てることから始まります。余計なものを捨てることから始まります。世は、もっと満たされなさい、豊かになりなさいと教えますが、神の国においては、一切を捨てなさいと教えます。

福音の始まりは、悔い改めです。悔い改めとは、自分というものの拘りを捨て、すべて自分自身について、主なる神に明け渡してしまうことです。荒野で叫ぶ者の声、バプテスマのヨハネの声を預言した時、イザヤはこう言いました。「すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くされる。(40:4)」主が真っ直ぐな道を歩かれるために、谷は引き上げられ、山や丘は低くされますが、私たちの心にある山や丘、自分が自分で生きてきたのだという自負、そういったものを主を見ることによって、低くしていただくことに他なりません。

主の前にへりくだると言ってもよいでしょう。ちなみに、ここの「心」はギリシア語では「**霊**」であります。単なる私たちの心ではありません。人と人との関係であれば、「心」が適切な訳でしょうが、「**霊**」ですから、神とのつながりにおける自分の部分であります。自分が人間の世界で生きていて、どうしようもない絶望感、無力感、何も自分には無いという状態です。神無しには生きていけないという切迫感です。神に必死にすがっている状態、神に拠り頼んでいる状態です。そして、「**貧しい**」も語弊があります。私たちが貧しいと言っても、まだ貯金があります。家があります。ここで言っているのは、何もない状態です。住むところない、着るものもない、食べることもできない、まさに乞食です。ですから、ある人は「**霊の乞食**」と訳しました。聖書を翻訳する時に、どうしても文学的、表現を柔らかくしてしまいがちですが、「**霊の乞食は幸い**」です、とイエス様は言っておられます。

### **3A 主ご自身との出会い**

これこそが福音の始まりです。どのようにして天の御国に入れるのか？の入口です。自分が何か変えられるかもしれないほんの少しでも思っていれば、自分の霊には救われるための財産が残っている、貯金があると思っただけです。けれども、霊において破産宣告を受けた者なのです。圧倒的に借金をして、返済できない状況なのです。全く自分には、神の御心にかなうことができるような力も知恵も、エネルギーもない。ということであります。多くの人が、自分を変えてからイエス様を信じようとします。自分はまだその高い次元に至っていないから、まだだめですと言います。それはこの世の考えなのです！天の御国では、その逆でないといけません。まだできていない、と考えるその発想がもうだめなのです。裏返すと、まだ自分には行けそうな部分があると思っただけです。

### **1B 神の栄光との比較**

では、どのようにして自分の霊が乞食状態であることに気づくことができるのでしょうか？それが、シナイ山におけるイスラエルの民たちの反応にヒントがあります。もう自分たちは、主の声を直接

聞いたら、生きていけない！とモーセに叫びました。主ご自身の聖なる姿を見る時に、私たちの内側に究極の飢餓状態が作り出されます。実は、神を見なければ、自分を正しく見ることができないのです。神を見ずして、自分をいくら卑しめても、痛めつけても、無理なのです。いや自分を卑しめる、痛めつけるということはやめなければいけません。神は愛しておられます。霊が乞食のようになっていることに気づくのは、主ご自身を見ることに尽きます。

ヨブのことを思い出してください。主ご自身が、ヨブは正しい人であり、神を恐れている者であることを認めておられました。そしてヨブに災いがかかることをお許しになられて、ヨブは、自分がこのような災いが降るような悪いことをした覚えが全く無いと主張します。そして、その主張は正しかったのです。そして、友人たちから、こてんぱんに謂れのない非難を受けたので、「私は自分の義を堅く保って手放さない。私の良心は生涯私を責めはしない。(27:6)」とまで言い張りました。ところが、主が嵐の中で現れました。それで彼は全く態度が変えられました。ヨブ記の最後でこう言っています。「私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。(42:5-6)」主を見ることによって、霊の貧しさが訪れたのです。

預言者イザヤもそうでした。彼は、ユダとエルサレムで行われている悪を見て、憤慨していました。それで、神が彼らに対して災いを下されることを預言しました。1章から5章までその災いが書いてあります。ところが、6章にてユダの王ウジヤが死んだ時にイザヤが幻を見た、とあります。「高く上げられた御座に着いておられる主を見た。」とあります。そして、そして御使いがそこで、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。(6:3)」と叫んでいます。イザヤは嘆きました、「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。(6:5)」

使徒ペテロも、主との出会いがそうでした。彼はイエス様をラビとして尊敬し、漁をしながらイエス様に付いて行っていました。ある時に、イエス様がペテロの舟の上から岸辺にいる群衆に御言葉を語られました。そして、網を降ろしなさいといわれました。一晩中、漁をしていたけれどもとれなかったと言って、けれどもおことばですから、と言って網を降ろしました。大量でした。そこで、ペテロは自分の職業に対するプライド、自負心が粉々に砕かれたのです。彼はイエス様に言いました。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。(ルカ 5:8)」彼の罪深さというのは、何か嘘をついたとか、盗みをしたとかそういうものではなく、自分の中にある自負心というか、自分であることを支える誇りであったのです。イエス様の前でそれが粉々に砕かれて、罪深い者と言ったのです。けれどもイエス様は、「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになる。(5:10)」と言われます。

使徒パウロもそうです、彼は律法の義については、非の打ちどころがありませんでした。本当に、

真面目に律法を守り行なった厳格なパリサイ派のラビでした。ところが、復活されたイエス様が栄光の姿で、ダマスコの途上にいたパウロに現れてくださいました。この時から彼は、全く変えられました。「しかし私は、自分にとって徳であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることにすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。(ピリピ 3:7-8)」ですので、彼はこう言いました。「何かを、自分がなしたことだと考える資格は、私たち自身にありません。私たちの資格は神から与えられるのです。(1コリント 3:5)」

## 2B 自己変革の絶望

このように、自分はキリストにあって全て満たされているけれども、キリストがいなければ何も無い、火の中に焼かれ、滅びゆく藁でしかないという悟り、気づきこそが、幸いであるということです。その空っぽになっている器に、神の満ち満ちたありさまが満たされます。それで、その後に来る幸いは、すべてこの霊の貧しさ、霊の乞食状態から出発します。神の国のすべて、キリスト者の全てが、ここを出発点としていると言っていいです。どうか、自分で自分を救おうとする努力から解放されますように。キリストが自分を救う方であることを受け入れ、信じることができますように。そして、この世には決してない、神からの祝福、救いの喜びを味わうことができますように。ペテロが言いました、「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びで躍っています。(1ペテロ 1:8)」